

信頼感で結ばれた顔の見える関係とネットでつながる顔の見えない関係。どんなコミュニティをつくるのか、一人ひとりにゆだねられている。

日本のコミュニティ・ビジネス提唱者であり、地域コミュニティ研究家である細内信孝さん。“コミュニティ”とはどういうものなのか、人と人とのつながりはどうなっていくのか、細内さんと一緒に考えていきます。

ー 私たちは“コミュニティ”という言葉をよく耳にしますが、使い手によって描いている像がまちまちで、何を“コミュニティ”というのか今一つわかりません。“コミュニティ”の原点を考えると、農山漁村の生活共同体に辿り着きますね。集約労働型の一次産業では、地域の人々が一同に力を合わせて働かなければ生活できませんでした。そうした土地柄から“結”や“講”、“若衆宿”といった生活共同体が生まれ、地域文化をつくってきました。

細内 今、“コミュニティ”を大きく括ると“地域コミュニティ”と“テーマコミュニティ”があります。一般的にはコミュニティというと“地域コミュニティ”のことを言います。テーマ型は都市特有の群れのコミュニティです。“環境”“福祉”“趣味の世界”などといった“テーマ性”に関心のある人同士のつながりです。



細内信孝(ほそうち・のぶたか)
コミュニティビジネス総合研究所代表取締役所長。1957年宇都宮市生まれ。民間シンクタンクを経て、94年よりコミュニティ・ビジネス提唱。97年NGOコミュニティ・ビジネス・ネットワーク設立、理事長につく。現在、法政大学大学院政策創造研究科兼任講師。<http://www.hosouchi.com>

“地域コミュニティ”の範囲は、一般的には中学校区の大きさです。人口が集中する都市部では小学校区相当でしょう。これは江戸期から明治にかけての、お上が民を管理するための一つの区分けです。例えば「小字(こあざ)」が小学校区、「大字(おおあざ)」が中学校区です。農村では小字が一つの村落共同体。決まりを破れば「村八分」にされました。

ー 現在のコミュニティはお上の意向から脱皮しようとしていますね。自分たちに関心あるテーマ、志向の合う人たちで集まって活動しています。産業構造が集約労働でなくても、生きられるようになりしました。成長期には村落共同体の煩わしさから逃れ、「ひとり」として都会に出てくれば、受け入れてくれる会社や学校がありました。けれども、もとを辿れば地縁共同体の中で生まれ育った人たちです。「個人化」しようと共同体を飛び出したものの「個人」として生きていく程の強さは持っていませんでした。都会でひとりの寂しさ、困りごとの解消などを一緒にする仲間を探して新しいコミュニティをつくりだしているように見えます。

細内 現在は、いろいろな地域でその地域に合ったコミュニティがつくられています。江戸時代から続く住民の自治組織もあれば、幾つものテーマコミュニティがつながっているニュータウンもあります。私は、人間はライフスタイルやライフステージに合わせ、自分が調和できるコミュニティに移住していけば良いと考えています。地域に根を生やさない「自立したフローな人間」としてカメレオンのように周りの環境に染まっていく。これが「ひとり」でなく、「個人」として生きる姿ではないでしょうか。「自立したフローな人間」が集まることで“マチ”も変化し続けます。日本では「個人化、自立化」できない人たちが大都会に住んでいるのです。

一 地方から出てきて会社に入り、企業戦士として働いてきた男性たちが、2007年以降、定年を迎え地域に戻ってきました。私の周りでは、そういう男性たちが農地を借りて有機農業を始めています。男性たちが戻れるところは「土」なのかと思わずにはられません。収穫した自慢の野菜でパーティを開き、よく招待してくれます。テイストのあった人たちと新たなコミュニティが築かれています。

細内 共感・共鳴のコミュニティですね。農地が残っている地域ではファーマー的なコミュニティをつくることができます。都会ではフロー型の人たちがテーマコミュニティを形成しています。30代では都会でバリバリ働いて、40代50代になったら緑の多いそうしたところに移住する。今までの一毛作としての企業戦士に疑問を持つ人が増え、そうした多毛作的な生き方や暮らし方ができるような選択可能な社会になるのではないのでしょうか。

一 住宅のフロー化が進んでいない日本では、まだ遠い話のような気がします。家のローンを抱え汲々としたカタツムリ生活が主流です。さらに子どもの教育費も重くのしかかってきます。

細内 しかし一方、東京近郊では適齢期の独身比率が30%を超えています。彼らは家にも子どもにも縛られず、優雅な生活(独身貴族)をしています。ライフスタイルのイノベーターとなって都会のマチの一角をつくっていています。

一 地縁や血縁が残る顔の見える関係の地域では個人が勝手なことはできません。けれど、“地縁コミュニティ”はだんだんと消滅していく方向にありますね。大きくなるのは“テーマコミュニティ”。顔が見えなくてもつながれる手段が広がっていきますね。

細内 フェイスブックやツイッターのつながりがそうです。都市型コミュニティは“情報”でつながる共感・共鳴の輪です。これは、本来「個人」の意思が確立している西洋的なものです。本来日本人は、農村共同体の相互に顔が見え、地域に関わって生活する“地域コミュニティ”の中にこそ、己の社会参加の場を得て、精神的にも健康的な生活が可能となり、長生きができるのです。

一 日本人は本来「個人化」できない民族なのでしょうか。



コミュニティ・ビジネスを手がける女性たち取材する細内さん

細内 私たちはもう一度、日本人としての自分たちのあり方(存在意義)を考えていく必要があります。各地域の風土に合った“地域コミュニティ”が、その存在の核になるべきなのです。

一 “コミュニティ”という言葉をもう一度日本語で言い表さなければ、指示待ちに慣れてしまった人々に“コミュニティ”が何なのかわからないままです。

細内 国際的に使われている“コミュニティ”という言葉を使い表す日本語は適正ではありません。“結”“講”など日本のコミュニティは、風土の中で生きる知恵から生まれてきました。今、その時代に戻することはできませんが、ICTを駆使して瞬時に情報が得られる時代です。

一 ネット化していく中で、“地域”はなくなっていくのでしょうか。

細内 私は、フェイスブックでの人と人のつながりを“クラウド(雲)コミュニティ”と呼んでいます。雲をつかむような実体のないコミュニティの存在です。“都会型コミュニティ”は“地域”とは関係のない方向に進化していくでしょう。そこでの人の姿は、自分でコントロールできない雲にのる孫悟空の存在です。地縁、血縁を気にせず、自由奔放に働き、生きていきますが、いつ崩壊するか分からないものです。

一 今、私たちはもう一度、自分がどう生きたいのか、どんなコミュニティをつくっていくのか、自分自身に問い直すときなのですね。